

立原正秋全集

第十七卷

角川書店

立原正秋全集 第十七卷

昭和五十八年三月十二日初版発行

著 者 立原正秋

発行者 角川春樹

印刷所 新興印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話東京二六五―七一一（大代表）

振替東京三一―九五二〇八 ㊦ 一〇二一

Printed in Japan 0393-573417-0946(0)



落丁・乱丁本はお取替いたします

立原正秋全集 第十七卷 目次

冬のかたみに

五

夢は枯野を

一七

猷修館往還

三七

埋れ水

四三

解題

武田勝彦
四三

冬のかたみに

第一章 幼年時代

父が無量寺から十日ぶりに下山してきた早春のある日の夕食のときだった。父と母は、春から私を黙溪書院に通わせるか、それとも无量寺の老師のもとに通わせるかで話しあっていた。私は父と同じ膳にむかい、母はつぎの間で弟と膳にむかっていた。父が下山してきたので食膳には牛の骨つき筋肉^{カルビ}が出ており、下女が炭火で焼きあげた筋肉を順次に台所から部屋に運んでいた。父の下山日は一定していなかった。五日目におりてくるときもあれば、ときには半月もおりてこないこともあった。寺では精進食だったので、父は家に帰ってくると驚くほど肉と魚と大蒜^{にんにく}と唐辛子を食膳にのせた。父が寺からおりてくる日がわかると、母は下男に命じて町まで骨つきの筋肉を買いにやらせた。下男はたいがい筋肉を三本か四本もとめてきて、俎板^{まいた}にのせ、食べよい大きさに鉋^{なた}できりおとした。そしてこれも食べよいように肉に庖丁で線をいれた。母は二人の下女をつかつて、醬油に蜂蜜をとき、大蒜をすりおろして混ぜ、胡麻をいれ、そこに筋肉を漬けた。父が寺からおりてくる日はたいがい前日にわかった。六十すぎの寺男が、

「明日は薬師殿さまがおりでこられます」

と知らせにくるのであった。母は寺男の労を謝し、たいがいなにはほかの金品をあたえた。父は無量寺の伽藍のなかの薬師殿に常住していたので、そのように呼ばれていた。母も村人から薬師殿さま、あるいは无量寺さま、と呼ば

れていた。無量寺の寺僧で麓に居を構えているのは私の家だけで、あとの僧はみな遠くに家がいった。

「あなたが僧侶になったからといって子供までを僧侶にすることはしないでしょ。黙溪書院に通わせた方がよいのではありませんか」

と母は言っていた。

「書院では四書五経だけを教える。僧堂なら四書五経のほかに仏法を教われるし、経典を身につけておいてわるいことはない。それに、僧堂に通ったからといって必ずしも僧侶になることはない」

と父は答えていた。

「重行が小学校にあがる頃にはどうしても大邸に尻ねばなりませんのに、僧堂の生活を身につけさせてどうなさるおつもりですか。わたしもいつまでもこんな淋しい村で暮すのはいやですよ」

「淋しいのなら生家に戻れ」

父はいくらか口調をあらげた。

それっきり母はだまりこみ、やがて食事が終って父は書斎にひきあげた。台所ではやつと下男と下女が食事をはじめていた。

私は数えて六歳になっていた。村の人達は親切だったし、両親が彼等から尊敬されていることを知っていたが、私は自分がおかれている立場をおぼろげながら感じていた。やがて私は物心つくようになって村の子供達と遊ぶようになったが、倭人とか合の子とかいった言葉を私に教えてくれたのは村の子供達だった。その言葉の意味を両親にたずねるのがなんとなく憚られ、子供なりに勘で意味を解釈していた。私の家には畳の部屋があり、ここは父が書斎に使っていたが、この畳の部屋が、村の人達の家にはなかった。村の人達の家では便所はすべて家と切りはなされ庭の隅にあった。こうした家の構造のちがいと家が使われている二つの国の言葉などから、私は自分がおかれている世界を感じとっていた。

父は無量寺からおりてくると数日家にいた。書斎にこもっていることが多かったが、春と秋には、下男をつれて昔

の窯場の跡をさがし歩いてゐた。窯場跡から掘りだした高麗青磁や李朝白磁が父の書齋にはかなりあり、台所で日常の雑器にも使われていた。父は、青磁の水注子に酒をいれ、白磁の染付の壺に花を一輪投げこんでいた。花は桔梗、龍胆、葉鶏頭などだった。そして青磁の鉢に木綿豆腐を盛り、刷毛目の茶碗で酒を酌んでいた。陶磁器が日常生活の伴侶になっていた。ときたま町から父の友人が訪ねてきて泊ることがあり、そんなとき父は友人と夜おそくまで酒を酌みかわした。友人達はみんな倭人だった。下男の文鐘台が、あの人達は父上の学校時代の仲間ですよ、と話してくれたことがあった。父は友人が帰るときに、土産だ、といって掘った青磁や白磁を持たせた。

後年、私は、無作為なこれらの青磁や白磁が、私の裡に明確な記憶残像としてあとをとどめているのに気づき、類のない幸福な幼年時代を過したことを知った。しかし私の幼年時代は一方で限らない無常感に充ちていた。

文鐘台が川芹と例年より早い山菜を摘んできた春のある日の朝、私は父につれられて無量寺にのぼった。いつものように家族が門まで見送りに出てきたとき、

「鐘台もそろそろ嫁をもらわないといかんな」

と父が言った。彼は二十二歳になっていた。彼はあかくなつて顔を伏せ、権淑河と李麗安の二人の下女が面白そうに彼を見ていた。淑河は十七歳、麗安は十六歳だった。

村から寺領の入口までは近かった。村を出はざれたところに溪流があり、弓なりに反った半月橋という石橋を渡ると、溪流を左に見て伽藍への道が続いている。並木は赤松の古木と槭樹が殆どで、私は茸とりに鐘台について何度かこの道を歩いていた。溪流の川床は石が透けてみえ、流れに朝の陽がきらめいていた。溪流の水は村にはいつて田圃に引きいれられていた。そしていくつかの小さな流れになり、そこには鮒や泥鰌や鰻がいた。

私は、溪流に魚はいないかとあちこちを見こちちを見しながら父の後を歩いた。川向うの山にも、右側の山にも、いくつかの径があり、径がつきるあたりに庵の瓦屋根がみえた。鐘台の話では、それらの庵には四溟庵とか毘盧庵とか普陀庵とかいった名がついており、えらい禪師にはなれなかったがしかし仏法を修めつくした年老いた僧が棲んでい

るとのことだった。庵は全部で十五はあるだろうという話だった。

父は無量寺につくまでただ黙々と歩いていった。

やがて山門についた。山門の前を小さな溪流が横切っており、石橋を渡ると、入口の右側に大きな石碑が建っている。東国第一禅院无量寺と刻みこまれている。後年私が調べたところでは、无量寺は新羅第二十七代善徳女王十五年、西紀六四六年に、慈蔵律師が創建し、短い期間、法眼宗、湊仰宗、雲門宗、黄檗宗を提唱した時代もあったが、李朝時代にはいつから臨済本来の家風を守り今日にいたっていた。

私は棗師殿の前でしばらく待たされた。やがて袈裟をとって平服の僧衣を着た父が出てきた。僧堂は本院の東にあり、そう深くない溪谷にかかっている石橋を渡った山に建っていた。

私は、前日父から教えられた通りに老師の部屋に入って三拝し、本日よりお教えを乞います、とお願いした。

「ああ、大きくなったな。今日からおまえはわたしの子じや。わたしの子は仏さまの子じや。おまえには梵海禪文という名をあげよう。だから今日からは単に梵海とか禪文とかよばれる。家ですこしは字を教えたか？」

老師は父にきいた。

「いえ、漢字はまったく教えておりません。ハングルと日本の仮名は読み書きができますが」

それから父は老師と寺のことについてしばらく話していたが、やがて本院におりて行った。

この日から私は習字手本として四言古詩の「千字文」を、読む本として四書五経をあたえられた。

「あの子もおまえと同じ年頃にこの僧堂にきた」

とある日老師は「論語」の講義途中で言った。老師は父をあの子と呼んでいた。あの子はずいぶん苦勞をしたが、おまえはあんな苦勞はしない方がよい、と老師は言った。倭人とか合の子とかいった事と関係があるのだろう、と私はぼんやり考えた。

僧堂の一日は朝三時の起床からはじまった。庫裡の外に裏の溪流から引き入れた水が溢れている大きな四角の石槽があり、水をくんで顔を洗うと本堂である大雄殿で礼仏坐禅、五時朝食、六時から九時まで本堂で老師の講義、九時

から十一時まで雲水達は自習、この間私は九時から正午まで老師の講義をきき、正午昼食、午後は五時まで作務^{きむ}で、畑を耕す日もあるれば豆腐をこしらえる日もあった。無量寺の伽藍で使う豆腐、味噌、醬油はすべて僧堂でつくられていた。私は午後は自由時間が多かった。雲水達は週に二回、午後は本院に講義をききにおりて行つた。本院には仏教叢林^{そうりん}という専門学校があり、宗務長をつとめている父はそこで若い僧侶達に教えていた。この叢林には各地から若い僧侶が学びにきていた。

最初の三日間の僧堂生活を終え、四日目の昼、食事をすませると、私は老師にいとまを告げ、《論語》をわきにはさんで山からおりてきた。老師は、解らない言葉でも、百回読めば意味は自ずとわかってくるものだ、と言った。樹木がやつと芽をふいてきたばかりの山をおりてきたら、村の田園風景は三日前よりさらに春らしくなっていた。水がぬるんできたのか、畔^{きり}のかたわらの流れでは村の子供達が魚を獲っていた。

「もう獲れるのかい」

と私が子供達のそばに行つてみたら、みんなバケツや甕に鮒や泥鰌をいっぱいにしていた。

「いけねえ、これじゃみんなに獲られてしまうな」

私は家に走つて帰ると縁側に本を投げ、鐘台が大事にしている柳製の箕とバケツを持って流れに行つた。

流れは幅が一メートル五十ほどで水深は三十センチあり、水底は小石で、いつも魚の姿がよく見えた。私は、村の子供達がかたまっている場所からすこし下流の方に行き、靴と靴下をとつて水に入つた。水はまだつめたたく、芹や草だけが青かった。私が水に入ると魚は草叢に姿を隠した。私は静かに箕を草叢に入れ、足で草を踏んだ。そうして箕をあげたら、泥鰌が五匹、鮒が二匹入っていた。子供達はみんなこの方法で魚を獲っていた。無量寺の山から流れてくるいくつかの溪流は、村に入ってから一本の川になり、かなりの水深があった。そこでは大きな鯉や鰻が、夏になると鮎が獲れたが、子供達が入るのは禁じられていた。それでも大きな魚をつかまえようと出かけて深みにはまりこみ、年に何人かの子供が死んでいった。どこの家でも子供達が獲ってきた泥鰌と鮒を食卓にのせた。泥鰌はたいがい

里芋の赤芽の茎を乾したのを水にもどし、豆腐といっしょに泥鰌をいれて骨がとけてしまうまで煮込むのであった。鰯は刺身にし、唐辛子味噌を酢でとき、そこにつけて食べた。鐘台は鰯を三枚におろすのが上手だった。

草叢に箕をいれ足で踏んでつかまえるのを一時間もやっている、たいがいバケツ半杯は魚が獲れた。いくら獲っても流れの魚は減らなかつた。私より大きいもう学校に通っている子供達は、こうした魚獲法に習熟していた。しかしなんといつてもいちばんうまいのは鐘台で、彼は魚があつまっている場所を勘でさぐりあて、彼がいちど箕をいれるとたいがい十四から二十四は獲れた。後年私はいろいろと釣りをやったが、あれだけ原始的で、自然にとけこんだあの幼年時代の魚獲法にまさる方法はほかになかつた。そこには夾雑物が入りこむ余地のない子供と田園の世界が展がっていた。

「おい、無量寺、獲れたか」

私が四回目の箕をいれていたとき、村の子供達が場所をかえてこっちにやってきた。彼等は私のバケツをのぞきこみ、みんな小さいな、と言った。そして彼等はめいめいの容器から私のバケツに適当に魚をわけてくれた。

「こんどまたあれをくれよな」

と年長の仁勲が私に言った。私の家のとなりの李家の息子で、あれとはチョコレートのことだった。帰宅したら、川へ行ってはいけなかつたのに、と母が小言をいった。

「小川だよ」

と私は弁解した。

僧堂の生活はつらくなかつたか、と母はきいた。たのしかつた、と私は答えた。いまはよいが冬はつらくなることだろう、黙溪書院に通わせればよいのに、と母はそこにいない父に不平をのべた。村の子達はみな黙溪書院に通っていた。書院の先生はもうだいたいぶ齢をとった老人で、チョゴリ（上衣）と、バジ（ズボン）に冠をかぶり、柄のながい煙管をもつてよく村を歩いていた。

数日が過ぎて僧堂にのぼったら、本院から小僧と叢林で学んでいる青年僧が数人、豆腐と卯の花を受けとりききており、庫裡当番の雲水が、石槽から豆腐をとりだしていた。青年僧の一人が、宗務長のお子さんですか、ときいていた。

「そうです」

と雲水は石槽から豆腐をあげて木槽に移しながら答えると、早く老師のもとに行きなさい、昼から山菜摘みに連れて行ってあげるから、と私に言った。私は小僧達とくちをききたかったが、またつぎのおりにしようと思った。

大雄殿では雲水達が老師の講義をきいていた。私は老師の部屋に入って机にむかった。硯に墨を搦り、手本の木版刷の《千字文》をあげ、朝鮮紙に天地玄黄と書いた。三回ほど書いたら厭きてきたので、廊下に出た。廊下は廻廊になっており、中庭をはさんで老師の居間のむかいに遷化堂、右に大雄殿、左は楼になっていた。遷化堂には無量寺代代の禅師の肖像画がかかっていた。私は楼に行った。楼の下は広場で、石段を登ると中庭だった。楼から表の境内を見おろしていたら、庫裡から豆腐の入った木槽を担った本院の僧達が出てきた。

「円俊先生の子だ」

と小僧がこっちを見あげて言った。父は閑居円俊と呼ばれていた。

「だまって歩け」

と青年僧の一人が小僧を叱った。するとその小僧はおとなしく両手を前に合わせ、足もとをみて歩いた。木槽にはふとい綱が四本からめてあり、うしろを担っている僧がその綱を手で動かないように押えていたが、歩くたびに木槽が揺れ、水がこぼれ落ちた。木槽の水が陽に光り、なかの豆腐が白かった。やがて一行は林のなかに消えて行った。境内の前方は雑木林で、その向うには寺領の田園がひらけていた。それは厭きない眺めだった。

やがて庫裡の方で九時を告げる木槌の音がした。時を知らせるこの大きな分厚い板は庫裡の出入口にさがっており、板の中心は叩かれてへこんでいた。私は老師の部屋に戻り、紙にまた天地玄黄と書いた。

本堂から戻った老師は、楼からなに見えたか、ときいた。豆腐が見えた、と私は答えた。

「それは面白いものが見えたな。今日は〈論語〉はやめ、面白い話をしてやろう」
老師はそれから寒山・拾得の話をした。

話をききながら私は笑いこぼれた。国清寺で二人が罵声を発しながら廊下を悠々と歩き他の僧侶を困らせたり、寺僧達が食べのこした食物を拾って竹筒に蓄えて食糧にしたりした話が、謹厳な顔をしている無量寺の雲水達と比べて面白かった。

「人間は苦しみが多すぎると寒山・拾得にはなれない。おまえは寒山・拾得にならなければいけないよ」

この日、私は、なにか豊かな気持ちになって僧堂からおりた。そして家に帰ってから鐘台と淑河と麗安に寒山・拾得の話をしてきかせたが、三人は、その二人は乞食坊主だ、と言った。三人がすこしも笑わないので、私はすこしばかり腹をたて、お前達には寒山・拾得が解らないのだ、と言った。

四月から五月にかけて、雲水達は交替でせつせと山菜摘みにはげんでいた。食膳には三度三度山菜がのった。紫萁だけは乾して丸く束ね、藁でくくり、庫裡の軒につるした。貯蔵食糧であった。いっしょに出かけた私に、雲水達は樹木の名をよく教えてくれた。これは藪山査子、これは酸塊、これは山莓、これは橡の木、と教えてくれた。秋になると実がなるが、この木の実は食べられる、などとも教えてくれた。

僧堂の朝食は一汁一菜だった。木綿豆腐の味噌汁に山菜の胡麻和えだった。昼間はそこに大豆藁の胡麻油炒めがつき、夜は豆腐の煮つけに、稚海藻汁がついた。季節に応じて食卓も変化していったが、一汁一菜にかわりはなかった。庫裡にはいろいろな道具があった。石臼は殆どまいにも使われていた。豆腐をつくる大豆を碾き、饅頭をうつ小麦を碾いていた。胡麻油は五日も六日もかかって絞られていた。分厚い板を四角に組みあわせ、麻布に包んだ胡麻を中に入れて重石をしておくと、二日目頃に木枠の横の穴から油がたれはじめる。それは一滴二滴といった落ちかただった。搾ったあとの糟は石のようにかたく、私はよくその糟をもらってかじった。

ここには、閉鎖された世界ではあったが、生活共同体があった。外から買いいれるものは、砂糖、塩、海草に衣服地ぐらいのものだった。雲水は三十人ちかくいたが、田畑のいそがしいときは叢林の僧侶が手伝いにきていた。